



福祉ネット「ナナの家」会報

福祉インタビュー：会報 26 号（2006 年 5 月発行）



第 23 回福祉インタビュー

谷田貝 肇 先生

福祉ネット「ナナの家」言語療法講師、言語聴覚士

聞き手：皆河える子

<趣味はダイビング！>

皆 河：今日はやっとやっと実現することになった「ナナの家」の言語聴覚士の“やった先生”こと、谷田貝肇先生をお迎えしてのインタビューです。

谷田貝：こういうの苦手なので、よろしくをお願いします。

皆 河：今日は先生のワンマンショー。いつも先生が考えていらっしゃる事や目指していらっしゃる事を話していただけたらと思います。先生はどちらの方ですか？

谷田貝：5歳の時に川崎に引っ越してきてずっと川崎。今の所。

皆 河：都会っ子なのですね。

谷田貝：そうですね。

皆 河：ダイビングがお好きと伺いましたが。

谷田貝：そうですね。ダイビングは。でももう去年も結局一回もいけませんでしたし。今年は行きたいですね。

皆 河：潜りの魅力というのは何ですか？

谷田貝：自分が一番好きなのは美しい海に潜ること。この魚が何なのかというよりも、ただ潜っていて、ただ美しさの中にいるだけでいいですね。

皆 河：まるで別世界？

谷田貝：そうですね。

<山登りの言語療法>

皆 河：先生は言語聴覚士として島田療育園で20年近くお仕事されてきましたが、先生の目指していらっしゃることを少しお話下さいますか？

谷田貝：あまり難しい事は考えていませんが、元々子どもが発達しているのは子ども自身の力なので、自分が特別な事をやっているのではないと思っています。ただ自分は道標を少しつけたり、少し後押しをしたり、道案内をしてあげたりする。

それが自分の仕事だと思っています。発達というのは頂上を目指して登っていく山登りと似ています。初めて山を登る時は、不安だったり道が分からなかったりする事があると思います。障害をもった方々を長年見てきているので、初めてのお母さんよりは、私の方が少し色々な事を知っているし、色々な経験があるので、道案内ができるかな・・・と。それで山登りというのはやはりただ曲線で頂上を目指せばいいのではなくて、いろは坂を登っているようにジグザグで登ったり、階段を登っているように登っていったと思ったら踊り場があってずっと同じ所にしばらくいたり。また時には登っていたと思ったら今度は足踏みをして休憩していて、それからまた登っていったりして。また直線で登っているのではなくてぐるりと遠回りして山を一周して登っていったりとか。色々な登り方があると思います。その時初めての人達は、こんなに寄り道しながら行っていいんだらうか？こんなに遠回りしながら行っていいのかな？と不安になる事が沢山あると思います。そういう時に道案内とか、あと道がいくつもある時には、標識を立てておいてあげるとか、そういう事が自分の役目かなと思ったり仕事をしています。

皆 河：そういう道案内人がいると安心しますね。でも私なんかよく道しるべを読まないで、誤った判断をしてしまいます。それで無理な事を子どもに願ったりすると、先生はすごく厳しいですね。

谷田貝：そんなことないですよ。ただやっぱり間違えた時一番辛いのは本人なので、そういう事はできるだけ避けられてほうが無難かなと思っています。

皆 河：いつも先生は「可能性のある事にかけましょう。」とおっしゃいますよね。いくら訓練してもできない事や無理な事に時間をかけるのではなくて、

自己実現と繋がる。なるべくそういう事に時間をかけてはどうかと。

谷田貝：やっぱりちゃんと頂上は目指したいので、間違っただ道を行ってしまうと袋小路や行き止まりになってしまったり。行き止まりの所でいくらかもがいていてもその先には進めないの、やっぱりそのための道案内ですかね。

皆 河：その子ども達の能力を測るには、先生がその子を見た感じというのではなくて、検査が必要になるわけですかね？今うちでは検査キッズに田中ビネーを使っていますね？

谷田貝：そうです。やっぱり一番大切な事は今のその子の能力正しく知った上で道案内をする事だと思います。その子の能力を知らないまま、ただ「歩きなさい!」、「歩きなさい!」と号令かけても息切れさせてしまうし。

皆 河：先生がいつもどんな方法でなさっているのか教えて下さい。

谷田貝：本当であればもっと色々な検査器具が他にもあればいいと思うのですが、とりあえず全体の発達レベルが分かるものと言語の発達レベルが分かるものという事で、ここには田中ビネー、言語発達遅滞検査とその他の質問紙による検査器具、それとできるだけ最低必要なものは揃えてもらっています。

皆 河：それでは何か親御さんたちに伝えたい事はありますか？ここはお母さんと一緒に受けにきたりお子さんが言語の勉強をされた後にお母さんに報告されたりして、先生と親御さんとお子さん、ある時は学校と連携していますから。

谷田貝：そうですね。でもここに来られているお母さん方皆さんとてもお子さんの事大事に考えられていて、決して子どもに対して過剰な期待はしていらっしゃらないので。

皆 河：え？、そういうケースがよそには多いのですか？

谷田貝：はい。それは一つには子どもの今の発達レベルや能力というのがどうしてもちゃんと把握できなくて、お母さんの目から見ると時には正しく判断する事が難しい事もありますので、それで第三者の目から見た時にどう判断するかというところで助けられれば良いと思います。

皆 河：先生の言語レッスンのゴールデンタイムは放課後の時間で、大変入り込むのが難しい。それで長休暇の時に臨時で発達検査を受けられるようにしています。その時お母さん方が驚かれまね。検査を受けないと、つい期待もあるので、能力以上に出来ると思ってしまふんですね。先生の報告を聞き、初めてそういえば・・・と心当たりしたりするんです。うちの子は二十歳を超えているから今更発達しないのかと思い、余り期待しなかったのですが(失礼!)、実に発達して

いきますね。先生の言語を受けて自信がついてきました。すると生活の随所で自己主張するようになり、「今こんなこと言わなかった？」なんて家族でささやき合ったりします。何歳ぐらいまで人間というのは発達するのでしょうか？

谷田貝：それは死ぬまでではないでしょうか？

皆 河：その曲線が違っていただけなんではないですか？

谷田貝：例えばその時期その時期で身に付ける種類が違うといったらいいのでしょうかね。やっぱり子どもの頃でなければつけられない能力もあるし、大人になってから更に磨きをかけていく能力もあります。そこを間違えてしまうと、やっぱり駄目なのかと思いかねません。子どもの頃に身に付けなければいけなかった能力、例えば音楽で言えば絶対音感を身に付けようというのは大人になってからでは出来ないわけですよ。それを小さい頃にしなかったからじゃあ大人になってからやりましようといっていくら努力しても無駄な努力になるわけですよ。だったらそういう無駄な努力をしないで、絶対音感に変わる別の物を大人になってから身に付けなければいい。言語に関わる学習でも同じ事があると思います。

皆 河：そういえば、言語療法についてご存知無い方は、言語療法の内容を狭く捉えるかもしれませんね。先生の言語療法は、とても広いものを目指していらっしゃいますよね？

谷田貝：そうですね。言語という言葉だけと捉えられがちなのですが、結局言葉の発達を促すためには、色々な要素が必要になるわけです。やる気とか話したいという気持ちがなければ話す学習はできないし。あとコミュニケーションを上手くとっていくには様々な能力が必要なので、子どもの場合はその全体的な能力を促す事も必要です。例えば手の発達を促す事も結局知的発達に繋がっている。知的発達というのはコミュニケーション能力に繋がっている。つまりその子どもの全ての能力が得られていくようにならないといけないのかなと思っています。

皆 河：その子の得意な事というのを核にしていくのでしょうか？

谷田貝：そうですね。自分としては基本的にはできない事を「できない」というのではなくて、やはりその子の得意な部分を伸ばしていく事が一番なのではないかと思えますね。

<まるでシュバイツァー>

皆 河：先生は日本に“言語療法”が導入された時からこの道を目指されたと伺っています。

谷田貝：元々言語という仕事は必要だと言われていたの

ですが、日本にはそういう養成がなかなかなかったわけですね。国立の養成機関が一箇所だけありましたが、自分が言語聴覚士になりたいと思った時点では年齢が合わずにその学校は無理だった。それで民間にできた一番初めの養成学校に入学しました。

皆 河：先生はその学校に入るために学校の近くに引越されましたよね？

谷田貝：そうです。名古屋に。

皆 河：並々ならぬ人生の転機に私は思えたのですが。元々福祉のお仕事されていたか？

谷田貝：いえいえ。全然違う仕事です。

皆 河：もしよろしければどんな？

谷田貝：最初は宝石を売っていました。

皆 河：宝石を売るお仕事から、どうして言語聴覚士？それはとっても飛躍に思えるのですが。

谷田貝：元々言語聴覚士というのがあること自体知らなかったのですが、ある日新聞で言語聴覚士の仕事の記事を読みまして、それを見た時に、「これをやりたい！」と思いました。

皆 河：それは……。まるで一枚のちらしで人生を変えたシュバイツアーのようなお話ですね……。

谷田貝：その新聞を読んでからもなかなか行動に移せなくて、それで30の時にもうこれ以上鬱々としていてもしょうがないなと決心したんです。

皆 河：確かシュバイツアーも30の時でしたよ！アフリカのお医者さんを目指したのは。

谷田貝：そうですか？！

<やった先生の新たな挑戦>

皆 河：宝石売りから言語聴覚士。島田療育園で19年、「ナナの家」で2年経ちますね。そしてまた今度は言語聴覚だけでは留まらず、また新しい試みを始められたのですか？針灸の。

谷田貝：言語の仕事もちろん手ごたえもあるとしてもやりがいのある仕事なのですが、ただ自分の周りで病気になってしまう方が結構いましたね。で病気になって入院してしまうとか。それでその時にやはり自分は病気になってから治療するのではなくて……。

皆 河：予防ですかね？

谷田貝：はい。病気になる前にもうちょっとなんとかできるのではないかと思います、やはり予防というのが一番ではないかなとその時実感したわけですね。で針灸というのは実は皆さん腰が痛いとか肩が凝るとかどちらかというそういう痛みにたいしては効く物だなと。そういうイメージ、捉え方をされている方が多いのですが、実は針灸というのは未病といって病気になる前の……。

皆 河：みびよう？

谷田貝：病気というほどではないのですが、ちょっと体調がおかしいなとかそういう未病の段階で治療していくものです。今でいう予防医学というのが。日本では昔からあったんですね。針灸は実に色々な事に効果があるので。自分が針灸に関わっていく中で、何故だか科学的には分かりにくいけれど、効くんだよというのが実際に分かりますよね。針灸というとなんだか民間治療的というか、端の方に追いやられているような感じがありますが、でも実はこれはいいものなのだというのを実感しました。それに自分が実際に患者さんを治すことができますよね。そういうところに魅力を感じました。

<ナナの家の“ヘルスキーパー”>

皆 河：海にも潜らず、3年間勉強されて、このたび。国家資格をお取りになりましたね。実は私もスタッフも針は苦手なんです。だけど谷田貝先生は不思議と人の信頼を得る人だから、やった先生に針打たれるなら我慢する……と言う声が聞こえていますよ。

谷田貝：そうですか。

皆 河：そう。「ナナの家」の活動の中では家族サポート活動として、介護者にやさしい気功法とか薬膳を行ってきましたが、ぜひ先生の新しい力も発揮して欲しいと願いますね。

谷田貝：そうですね。子育てのお母さん方や「ナナの家」の職員の皆さんの“ヘルスキーパー”的な仕事もできればいいかなと思います。

皆 河：それでは、「ナナの家」の新しい“ヘルスキーパー”の誕生ですね。また忙しくなる前に、ぜひ美しい海にも潜ってきて下さい。これからもよろしくお願いします！今日は言語のレッスンでお疲れのところ、ありがとうございました。